研究ノート

イブン・スィーナー著『治癒』文献解題

小林　春夫　東京学芸大学

本書はイブン・スィーナー（Ibn Sīnā, 三七〇／九八〇年―四二八／一〇三七年）の主著の一つであり、イスラーム世界は言うまでもなく、中世ユダヤ思想、西欧キリスト教思想、東方キリスト教思想などにも多大な影響を与えた第一級の書物である。その議論の詳細や重要性については、今後の訳註作業や比較研究によって明らかにされるであろうから、ここでは本書の成立過程と内容構成について簡略に述べ、翻訳・研究にあたって使用するテクストや主要参考文献を示すにとどめる。

一．著作活動

イブン・スィーナーの生涯および著作活動については『自伝』（三三歳頃まで）および彼の弟子であるジューズジャーニー（Abū ʻUbayd al-Jūzjānī）によるその補遺（イブン・スィーナーの死までとその著作目録）によってある程度まで知ることができる[1]。ただし、彼の著作は大小合わせて一〇〇点を越えると見られ、そのすべてについて真偽を確定し詳細な文献目録を作成することは現状では不可能である[2]。そこで次には、一二点の主要著作を五期に区分し、イブン・スィーナーの思想的発展を跡付けたグタス（D. Gutas）の研究を基にして著作活動を整理しておく[3]。

Ⅰ．**初期**　誕生からサーマーン朝の宮廷に出仕するまでの時期。舞台はブハラ。『自伝』ではこの時期に受けた教育内容や教師について具体的に述べられており、イブン・スィーナーの思想形成を知る上で重要。この時期の主要な著作は次の通り。

1．『霊魂論綱要』（*Maqālah fī al-nafs ʻalā sunnat al-ikhtiṣār*）一七歳頃の処女作。

2．『集約』＝『アルーディーのための哲学』（*Kitāb al-Majmūʼ, al-Hikmah al-ʻArūḍīyah*）二一歳頃。論理学、自然学、形而上学について概略を述べたもので、『治癒』を含め、これ以降の体系的哲学書の原型となった。今日、論理学と形而上学の一部のみが伝存する。

3．『入手できるものと検証されたもの』（*al-Ḥāṣil wa al-maḥṣūl*）二二～二三歳。アリストテレス（逍遥）学派の哲学書に対する註釈書であったとされ、二〇巻からなる大著。『敬虔と罪』（*al-Birr wa al-ithm*）アリストテレス学派の倫理学に関する書物。ここらはいずれも散逸し現存しない。

Ⅱ．**移行期**　サーマーン朝の政治的混乱を避けてブハラを去り（二二歳～二五歳頃）、出仕先を求めてグルガーンジュ、ジュルジャーン、ライイ、ハマダーンを点々とする。この間に弟子のジューズジャーニーと出会う。アリストテレス哲学への註釈というスタイルから、独自の著述スタイルを確立するまでの移行期。

4．『起源と終末』（*al-Mabdaʼ wa al-maʼād*）四〇三／一〇一三年（三三歳）頃、ジュルジャーンにて執筆。現世の起源と終末（来世）についての論考。後の著作（『治癒』『救済』）の形而上学部分に一部が再録される。

5. 『人間霊魂の状態』（*Hāl al-nafs al-insānīyah*）[4] 四〇四／一〇一四年（三四歳）頃、ライイにて執筆。後の著作（『治癒』『救済』）の霊魂論部分に一部が再録される。

Ⅲ. 中間期　ハマダーンへ移住し（三五歳頃）、シャムス・アッダウラに仕える。シャムス・アッダウラの死後、敵方との密通を疑われ投獄と軟禁。イスファハーンに逃れ（四四歳頃）、アラーウ・アッダウラの下に身を寄せる。『治癒』に代表される体系的論述スタイルを確立する時期。

6. 『治癒』（*al-Shifā'*）四一一／一〇二〇―四一八／一〇二七年（四〇～四七歳）頃、ハマダーンおよびイスファハーンにて執筆。

7. 『救済』（*al-Najāt*）四一八／一〇二七年（四七歳）頃、シャープール・ハーストへの従軍中に執筆。以前の著作を編纂し一書としたもので、論理学・自然学・形而上学からなる綱要書。

8. 『アラーウ・アッダウラのための知恵の書』（*Dānisnāmah-i 'Alā'ī*）四一八／一〇二七年（四七歳）頃、イスファハーンにて執筆。論理学・自然学・形而上学からなる要綱書であるが、ペルシア語で書かれているところが特徴。

Ⅳ. 東方哲学期[5]　自らの哲学の独自性（「東方」性）を強調した時期。

9. 『東方哲学』（*al-Hikmah al-mashriqīyah*）四一八―四二〇／一〇二七―一〇二九年（四八歳）頃、イスファハーンにて執筆。四二五／一〇三四年にイスファハーンが侵略された時、戦利品としてガズナのスルタン・マスウード（Masūd b. Maḥmūd）の図書館に運ばれる。論理学と自然学のそれぞれ一部が残存するのみ。

10. 『公正なる判断』（*al-Inṣāf*）四二〇／一〇二九年（四九歳）頃、イスファハーンにて執筆。アリストテレスの著作（偽書『アリストテレスの神学』＝プロティノス『エンネアデス』のパラフレーズを含む）に対する膨大な注釈書であったとされる。四二一／一〇三〇年、ガズナのスルタン・マスウードの軍勢により略奪。今日、断片のみが残存。

Ⅴ. 末期　独自の哲学を完成させた時期。

11. 『指示と警告』（*al-Ishārāt wa al-Tanbīhāt*）[6] 四二一―四二五／一〇三〇―一〇三四年（五〇～五四歳）、イスファハーンにて執筆。体系的な著作としては最後のもので、独自の論述スタイルを完成。最後の部分でスーフィズムの理論化を試みている。

12. 『註釈』（*Ta'līqāt*）、『討論』（*Mubāḥathāt*）イブン・スィーナーが没する四二八／一〇三七年（五七歳）まで、イスファハーンにて書き継がれる。弟子たちとの質疑応答を記したメモが後代に編纂されたものと見られ、いくつかのバージョンが伝存する。

以上がイブン・スィーナーの著作活動の概要であるが、『治癒』の執筆経緯については、弟子のジューズジャーニーによる同書の序文や『伝記』などから次のような状況が知られている。すなわち、ハマダーンの領主シャムス・アッダウラの宰相を務めていた時期、弟子のジューズジャーニーは師の主要著作（『入手できるものと検証されたもの』『敬虔と罪』など）が参照不可能になっていることを憂慮し、それらを書き直すか、あるいは新たにアリストテレスの著作に対して註釈を書くこと――これが当時の主要な哲学書のスタイルであった――を依頼した。というのも、イブン・スィーナーには自著の原稿を手元に置いておく習慣がなかった上に、ブハラを後にして以来、各地を点々とする放浪生活の間に著作が散逸していたからである。これに対してイブン・スィーナーは、「（アリストテレスの著作に対する）逐語的な註釈を書く時間的余裕も意欲も今はない。しかし私自身の見解を論述するのでよければ――対立する見解を考慮し、それに反論する形式ではなく、私にとって正しいと思われる見解のみを叙述するのでよければ――私のよしとする順序に従って包括的な著作を書いてみよう」と応じた。弟子たちはこの提案を受け容れ、「自然学」の部分を二〇葉ほど書き進めたところで公務に妨げられて中断

した（四一一／一〇二〇年）。その後、シャムス・アッダウラの死を機に友人宅で潜伏生活を送っている時期に「自然学」（「植物論」「動物論」の部分を除く）と「形而上学」「論理学入門（イサゴーゲー）」の緒言を執筆。敵方との密通の廉によるファルダジャーン要塞への投獄と釈放（四一四／一〇二三―二四年）を経て、別の友人宅に仮寓中に「論理学」の大半（「カテゴリー論」「命題論」「推論」「論証」「トピカ」）を執筆。ハマダーンを逃れ、イスファハーンのアラーウ・アッダウラの下に身を寄せ（四一五／一〇二四年）、「論理学」の「詭弁論駁論」「弁論術」「詩学」と「数学」を執筆。アラーウ・アッダウラのシャープール・ハースト遠征に従軍中（四一八／一〇二七年）、「自然学」の残余部分（「植物学」「動物学」）を執筆。『治癒』はこのような目まぐるしい状況変化の中で、約七年の歳月を費やして完成された。特に、「形而上学」と「自然学」（植物学と動物学を除く）の部分は、潜伏していた友人宅で何の文献に頼ることもなく、驚くべき記憶力と集中力で書き上げられたと、ジュズジャーニーはその執筆状況をリアルに伝えている[7]。

以上の経緯は、弟子の視点からする多少の誇張はあるかもしれないが、大筋で事実であると考えられよう。つまり、四〇歳から四七歳頃という最も気力の充実していた時期に執筆され、現存する著作の中では最も大部なものであって、まさにイブン・スィーナーの哲学的主著とするに相応しい。

二．『治癒』の構成[8]

『治癒』は以下の四つの群（jumla）からなっている。これら四群のうち「数学」は体系的哲学書から省略されることが多いが（それはこの学科が学問として重要でないという意味ではなく、その内容が比較的不変で、繰り返し述べる必要がないと考えられていたという理由による）、他の三群の配列と内容構成は『導き』（*al-Hidāyah*）、『救済』（同書の数学部分は弟子のジューズジャーニーによって後に増補されている）、『知恵の泉』（*'Uyūn al-ḥikmah*）、『アラーウ・アッダウラのための知恵の書』（*Dānishnāmah-i 'Alā'ī*）、『指示と警告』（*al-Ishārāt wa al-tanbīhāt*）などの著作においても踏襲されている。もちろん、分量から言えば『治癒』はこれらの諸書を遙に凌駕しており、また後代の著者によって書かれた哲学書と比較しても最も大部である。

各群は複数の「部門」（fann）からなる。それぞれの部門はそれ自体独立した学（'ilm）と見做すこともでき、したがってそれぞれを独立した書として扱うことも可能である。実際に、後述するカイロ版の『治癒』は、それぞれの部門が独立した書冊として刊行されている。全体としてアリストテレスの学問分類に従っていることは言うまでもないが、「理論的学」と「実践的学」のうち後者（倫理学、政治学）は「形而上学」の末尾において簡略に扱われるにとどまっており、全体としては「理論哲学集成」とするのが妥当であろう。また、第一群の論理学と第二群から第四群までとでは部門の数え方（通し番号）が異なっていることに気づくであろう。これは、論理学が自然学・数学・形而上学のための「道具」（オルガノン）であるとの理解から、両者を区別する意図があるものと思われる。

部門の下位区分は「巻」（maqālah）と「章」（faṣl）である。その数から部門のおおよその分量を推定することができる。

第一群：論理学（Manṭiq）

第一部門：入門（＝イサゴーゲー、Madkhal）二巻一八章

第二部門：カテゴリー論（Maqūlāt）七巻三六章

第三部門：命題論（'Ibārah, Bārī irmīnās）二巻一五章

第四部門：推論（Qiyās＝三段論法、分析論前書）九巻六四章

第五部門：論証（Burhān＝分析論後書）四巻四一章

第六部門：トピカ（Ṭūbīqā＝弁証論 Jadal）七巻三三章

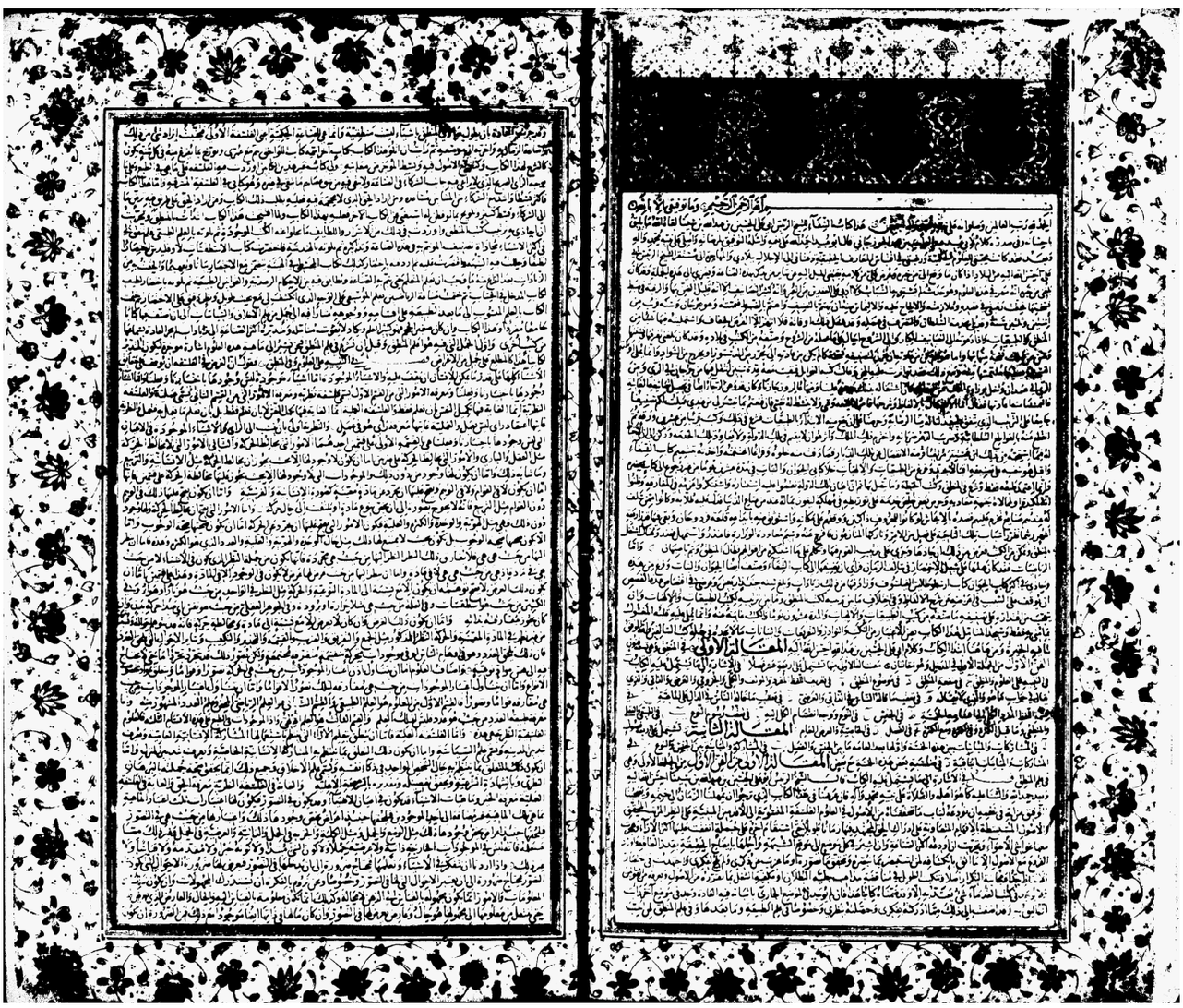
第七部門：詭弁論駁論（Sūfisṭīqā）二巻九章

第八部門：弁論術（Khiṭābah, Rīṭūrīqā）四巻二九章

第九部門：詩学（Shi'r）一巻八章

第二群：自然学（Ṭabī'īyāt）

第一部門：自然学（Samā' ṭabī'ī）四巻



「『治癒』「論理学」の冒頭部分（15世紀書写）－MS. British Library, OR 7500

五七章

第二部門：天体論（al-Samā' wa al-'ālam）一巻一〇章

第三部門：生成消滅論（al-Kawn wa al-fasād）一巻一五章

第四部門：気象論（Āthār 'ulwīyah）二巻一一章

第五部門：鉱物学（Ma'ādin wa-āthār 'ulwīyah）二巻一一章

第六部門：霊魂論（Nafs）五巻三二章[9]

第七部門：植物論（Nabāt）一巻七章

第八部門：動物論（Ṭabā'i' al-ḥayawān）一九巻五七章

Ⅲ．第三群：数学（Ta'līmīyāt, Riyāḍīyāt）[10]

第九部門：幾何学（Uṣūl al-handasah, Uṣṭuqussāt li-Ūqlīdis）一五巻

第十部門：天文学（Hay'ah, al-Majistī fī al-hay'ah）一三巻七七章

第十一部門：算術学（Ḥisāb, Arithmāṭīqī）四巻

第十二部門：音楽学（Mūsīqā）六巻一六章

Ⅳ．第四群

第十三部門：形而上学（Mā ba'da al-ṭabī'ah, Ilāhīyāt, Falsafah ūlā）[11]一〇巻五九章

三．テクスト

三・一　底本

邦訳にあたってはカイロ版（＝C）を底本とする。このカイロ版はイブン・スィーナー生誕一〇〇〇年を記念すべくエジプト

で着手された『治癒』全巻の出版プロジェクトの一部をなす。「形而上学」に限定して言うと、校訂に使用された写本はAzhar 331 Bakhīt（書写年六八四／一二八五）, Dār al-kutub 144 ḥikmah（六八四／一二八五）, Dār al-kutub 826 ḥikmah wa falsafah（一〇八四／一六七二）, Dār al-kutub 894 falsafah（n.d.）, British Museum Or. 7500（十五世紀。現在はBritish Library所蔵。挿絵参照）であり、一八八五年にテヘランで出版された石版本も参照されている。しかし、校訂者の一人であるアナワーティー自身が述べているように[12]、このテクストは数的にも質的にも限られた写本に基づいて速成されたものであり、厳密な意味での批判版とするには不十分である[13]。翻訳にあたっては、カイロ版の欠陥を補うための暫定的な手段として次の方法を採用した。第一に、アナワーティーが仏訳に際して付した正誤表（カイロ版における誤植の訂正が主である）を参照する[14]。第二に、ベルトラッチがカイロ版と、カイロ版では用いられていない四写本（Oxford, Bodleian, Pococke 125, 117, 110; Leiden 1444, Golius 4）、中世ラテン語訳（一二世紀）、『救済』（*al-Najāt*）の対応箇所、最近イランで刊行されたアームリー版を校合して作成した校合表（＝B）を参照する[15]。

三・二　底本以外のテキスト

二〇〇四年から刊行が開始されたイスファハーニー版（＝I）では、カイロ版、テヘラン石版を含めて八点の刊本と写本が参照されている。特に書写年が確定できる最古の写本であるMalik 1085や、トゥースィー（Naṣīr al-Dīn al-Ṭūsī, 一二七四年没）が所有していたとされる写本Madrasat Nimāzī 248、また時代は下るが、ミール・ダーマード（Mīr Dāmād, 一六三二年没）の校閲による写本Dānishghāh-i Tihrān, Mishkāt 242などが参照されている点が注目される。現在は、第二巻までしか刊行されていないが、これも参照する。

さらに、ナラーギーおよびモッラー・サドラーの註釈中に異読として取り上げられているものも必要に応じて紹介するが、網羅的に取り上げることはしない。

【参照文献】

底本

Ibn Sīnā, *al-Shifā', Ilāhīyāt*（*1*), ed. by Qanawātī and Sa'īd Zāyid; *Ilāhīyāt*（*2*), ed. by Muḥammad Yūsuf Mūsā, Sulaymān Dunyā & Sa'īd Zāyid, al-Qāhirah: al-Hay'ah al-'Āmmah li-Shu'ūn al-Maṭabi' al-Amīrīyah, 1380/1960（=C).

底本以外のテキスト

Ibn Sīnā, *al-Shifā',*（*al-Ilāhīyāt*）*wa-Ta'līqāt Ṣadr al-Muta'allihīn 'alayhā ma'a Zubdat al-Ḥawāshī min Mīr Dāmād, al-'Alawī, al-Khānsārī, al-Sabzawārī, al-Mullā Sulaymān, al-Mullā Awliyā' wa-Ghayrihim*, vol.1, ed. by Ḥāmid Nājī Iṣfahānī, Tihrān: Anjuman-i Āthār va Mufākhir-i Farhangī, 1383A.H./2004A.D.（＝I).

Avicenna, *The Metaphysics of the Healing,* ed. and transl. by Michael E. Marmura, Provo, UT: Brigham Young University Press, 2005（＝M).

Ibn Sīnā, *al-Ilāhīyāt min Kitāb al-Shifā',* ed. by Ḥasan Ḥasanzādah al-āmulī, Qum: Maktab al-I'lām al-Islāmī, 1376（＝A).

註釈

Ṣadr al-Dīn al-Shīrāzī, *Sharḥ va Ta'līqah-'i Ṣadr al-Muta'allihīn bar Ilāhīyāt-i Shifā'-i Shaykh al-Ra'īs Abū 'Alī ibn Sīnā,* 2vols, ed. by Najafqulī Ḥabībī, Tihrān: Bunyād Ḥikmat-i Islāmī Ṣadrā, 1382S.H./2003 or 2004A.D.（＝Ṣadrā).

Muḥammad Mahdī ibn Abī Dharr al-Narāqī, *Sharḥ al-Ilāhīyāt min Kitāb al-Shifā'*, ed. by Mahdī Muḥaqqiq, Tihrān: Mu'assasah-'i Muṭāla'āt-i Islāmī Dānishgāh-i Mak Gīl, Su'bah-'i Tihrān bā hamkārī-i Dānishgāh-i Tihrān, 1986A.D.（＝Narāqī).

翻訳

Avicenna Latinus, *Liber de Philosophia Prima sive Scientia Divina*, ed. par S. Van Riet, introduction doctrinale par G. Verbeke, vol. I（I-IV), vol. II（V-X), vol.3（Lexiques), Louvain: E. Peeters et Leiden: E. J. Brill, 1977-83（＝Avicenna Latinus, *Liber de Philosophia Prima*).

Avicenne, *La métaphysique du Shifā': livres I à V*, traduction française par Georges C, Anawati, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1978; *La métaphysique du Shifā': livres VI à X*, traduction française par Georges C. Anawati, Paris（＝ Anawati（tr.)I): Librairie Philosophique J. Vrin, 1985（＝Anawati（tr.)II).

Avicenna, *The Metaphysics of the Healing*, ed. and transl. by Michael E. Marmura, Provo, UT: Brigham Young University Press, 2005（＝Marmura（tr.)).

Avicenna（Ibn Sīnā), *Metafisica*: *La* scienza delle cose divine（Al-Ilāhiyyāt）dal Libro della Guarigione（Kitāb al-Šifā'), transl. by Olga Lizzini, 2nd ed., Milano: Bompiani, 2006（＝Avicenna, *Metafisica*).

岩見隆・木下雄介訳「アヴィセンナ『形而上学』（その一）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第三九号（二〇〇八）一四一―一五四頁。

その他参照文献

Ibn Sīnā, *Dānish-nāmah-i 'Alā'ī: Ilāhīyāt*, ed. by Muḥammad

Mu'īn, Tihrān: Dānishgāh-i Tihrān, 1331 S.H. / 1952 A.D.（= *Dānishnāmah, Ilāhīyāt*）.

Ibn Sīnā, *al-Ishārāt wa-al-Tanbīhāt ma'a Sharḥ Naṣīr al-Dīn al-Ṭūsī*, 4 vols., ed. by Sulaymān Dunyā, 3rd ed., al-Qāhirah: Dār al-Ma'ārif, 1984-1994 A.D.（= *al-Ishārāt*）.

Ibn Sīnā, *al-Najāh fī al-Ḥikmah al-Manṭiqīyah wa-al-Ṭabī'īyah wa-al-Ilāhīyah*, 2nd ed., Miṣr: Muḥyī al-Dīn Ṣabrī al-Kurdī, 1357 A.H. / 1938 A.D.（= *al-Najāh*）.

Anawati, G. Sh.（=Qanawātī）, *Mu'allafāt Ibn Sīnā*（*Essai de bibliographie avicennienne*）, al-Qāhirah: Dār al-Ma'ārif, 1950（= Anawati, *Mu'allafāt*）.

Mahdavī, Y., *Fihrist-i Nuskhah'hā-yi Muṣannafāt-i Ibn-i Sīnā*（*Bibliographie d'Ibn Sina*）, Tihrān: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tihrān, 1333 S.H./1954 A.D.（= Mahdavī, *Fihrist*）.

Bertolacci, A, *The Reception of Aristotle's Metaphysics in Avicenna's Kitāb al-Šifā': A Milestone of Western Metaphysical Thought*, Leiden, Boston: Brill, 2006（= *Recenption*; Appendix A, pp.483-558の校合表はBと略す）

【註】

（1）『自伝』、補遺、著作目録のアラビア語テクストと英訳は次の文献を参照。W. E. Gohlman, *The Life of Ibn Sina: A Critical Edition and Annotated Translation*, Albany: New York, State University of New York Press, 1974.

（2）現在のところ最も詳細かつ正確な書誌目録は次の文献である。Y. Mahdavī, *Fihrist-i Nuskhah'hā-yi Muṣannafāt-i Ibn-i Sīnā*（*Bibliographie d'Ibn Sina*）, Tihrān: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tihrān, 1333/1954.

（3）D. Gutas, *Avicenna and the Aristotelian Tradition: Introduction to Reading Avicenna's Philosophical Works*, Leiden, New York, København, Köln: E.J. Brill, 1988, pp. 79-145.

（4）この著書の執筆時期を『治癒』の完成後（イスファハーン、四二二／一〇三〇―四二八／一〇三七年）とし、ジェーズジャーニーの記述に登場するal-Ma'ādは『終末に関する犠牲祭の論考』（Risālah Adhḥawīyah fī al-ma'ād）を指すとする有力な意見もある。J. Michot, "Avicenne, La définition de l'âme," in A. de Libera *et alii*（éds.）, *Langages et philosophie: Hommage à Jean Jolivet*, Paris: J. Vrin, 1997, pp.240-241, n.6.

（5）「東方」「東方哲学」の意味について一時期、アリストテレス哲学とは異なる神秘哲学を示唆するとの説が唱えられたが、イブン・スィーナーにそのような「秘説」が存在するとする極端な解釈は陰を潜め、あくまでもアリストテレス解釈における彼自身の立場（＝東方哲学）を強調したものとする解釈が主流である。D. Gutas, op. cit., pp. 115-130を参照。

（6）註（4）にも紹介した〝ショーは本書をハマダーン時代（四〇五／一〇一五―四一四／一〇二四年）の初期に位置づけ、『治癒』の執筆順序と時期についても大幅な見直しを提案している。J. Michot, "La réponse d'Avicenne à Bahmanyār et al-Kirmānī: Présentation, traduction critique et lexique arabe-français de la *Mubāḥathāt III,*" *Muséon* 110（1997）, pp.153-163.

（7）Gohlman（ed.）, *The Life of Ibn Sina*, pp. 54-66.

（8）Anawati, *Mu'allafāt*, pp.30-66; Mahdavī, pp.129-169。

（9）Mahdavī, p.153では、第三巻を五章としているが、八章の誤りであろう。

（10）数学の部門番号は、後の形而上学が第一三部門とされていることからの逆算による（Mahdavī, p.158参照）。Anawati, *Mu'allafāt*, pp. 57-58では、第一部門として幾何学、第二部門として算術学、第一八（ママ）部門として音楽学が、部門番号なしで天文学が挙げられている。

（11）Anawati, *Mu'allafāt*, p.63では、書番号、部門番号、学問名なしに、形而上学の第一巻が始まっている。

（12）Anawati（tr.）, p.17.

（13）批判版の作成に向けた写本調査については、次を参照。A. Bertolacci, "On the Manuscripts of the *Ilāhiyyāt* of Avicenna's *Kitāb al-Shifā'*," in *Islamic Thought in the Middle Ages: Studies in Text, Transmission and Translation in Honour of Hans Daiber*, A. Akasoy and W. Raven（eds.）, Leiden: Brill, 2008, pp. 59-75.

（14）Anawati（tr.）, pp. 22-24.

（15）Bertolacci, *Reception*, pp. 483-558.

早稲田大学イスラーム地域研究機構公募研究
「イスラームにおける知の構造と変容―思想史的視点からの解明」

イブン・スィーナー著『治癒』研究会について

小林春夫（東京学芸大学）

早稲田大学イスラーム地域研究機構の公募研究として「イスラームにおける知の構造と変容―思想史的視点からの解明」が採択されたのは、二〇〇八年の秋のことである。この研究に携わっているメンバーの専門はイスラーム哲学、神学、スーフィズム、シーア派思想など多様であるが、研究手法としてはアラビア語やペルシア語等の文献を精密に読み解くことを基礎としている。そこで公募研究を進めるにあたって、それぞれの専門領域における個別研究と平行して、イスラーム世界さらにはその周辺の世界にも影響を及ぼした古典的テクストの読解を中心とする研究会を一つ設けてはどうか、ということになった。具体的なテクストの選定や運営方法については、公募研究の代表者である小林が以前から組織していたイブン・スィーナー研究会のそれを継承・発展させることで合意をみた。

原型となった研究会は、イブン・スィーナー（四二八／一〇三七年没）の主著『治癒』（*al-Shifāʾ*）の形而上学部分を対象とするもので、二〇〇六年の五月一三日（土）に第一回目を開催し、多い時で隔週ペース、少なくとも月に一回は開催することを目標とした。当初のメンバーは小林（イスラーム哲学）の他に、ギリシア哲学（新プラトン主義）を専門とする堀江聡（慶応義塾大学）、シリア語圏の思想史・科学史を専門とする高橋英海（東京大学）、イスラーム哲学と回儒研究を専門とする仁子寿晴（現京都大学）の三氏と、東京大学イスラム学科を中心とする大学院生数名であった。研究会は、アラビア語原典の精読は勿論のこと、同書を題材としてギリシア・イスラーム・シリア・中世ラテン語世界に及ぶ比較思想史的な展望を得るという壮大な目標を掲げた。このためもあり、研究会は毎回八時間以上に及んだが、その過半はある単語ないし概念を巡る多面的な（しばしば果てしのない）議論に費やされ、一通り検討を終え訳文を確定しえたテクストの分量が一頁にも満たないことがしばしばあった。遅々とした研究会の歩みは読了・翻訳完成という点からすればマイナスであろうが、多面的理解の獲得や異領域間の情報交換といった共同研究の目的からすれば大いに成果があったとも言えるであろう。

研究会の拠点を早稲田大学イスラーム地域研究機構に移して以降（二〇〇八年一二月二三日第一回）も、上で述べた運営方針に基本的な変更はない。ただ、イスマーイール派および哲学研究が専門の野元晋（慶応義塾大学）、ナーセレ・ホスロウおよびペルシア文学が専門の徳原靖浩（東京外国語大学）、ブワイフ朝史が専門の橋爪烈（日本学術振興会）の三氏が主要メンバーとして新たに加わった他に、他大学の院生の参加者も増加している。早稲田大学イスラーム地域研究機構のホームページに案内文を掲載しているように、この研究会はイスラーム思想研究者のみならずギリシア思想、中世ラテン思想、ユダヤ思想などの専門家にも広く参加を呼びかけている。このこともあって、アラビア語未修者のために中世ラテン語訳（Avicenna Latinus）や仏訳、英訳なども適宜参照するようにしている。

……

本研究会の成果を『イスラーム地域研究ジャーナル』に発表してゆくことになったのを機に、ここ数回の研究会では既読箇所の再検討を行っている。この作業は予想以上に難航し、初回検討時より時間をかけた箇所も少なくない。また、今後の出版を視野に入れて、文献解題を執筆し、凡例、訳注、アラビア語・日本語語彙索引を作成することとした。今号には、さしあたり小林による解題のみを発表する。

前身の研究会が発足してから、やがて四年の歳月が経過しようとしている。これまで研究会に参加してくださった方々のお名前を列挙することは差し控えるが、それぞれの顔を思い浮かべつつ感謝を申し上げたい。形而上学の全訳が完成するまでの道程を考えると気が遠くなりそうでもあるが、新たなメンバーも含めて、今後とも研究会への積極的な参加を期待する。